エスニック言語状況の動態と文化的アイデンティティ

森 岡 修 一

Trends in the Ethno-linguistic Situation and Ethno-cultural Identity

Shuichi MORIOKA

Summary

The socio-economic and political problems arising out of the peculiarities of modern development in the USSR have been further complicated by ethnic problems. The distinctive character and cultural unity of individual territories are a result of common historical destinies through many generations linked by linguistic and specific features in their material and spiritual culture. Nevertheless, after October Revolution some boundaries of countries were established without taking into account the ethnic territories of the peoples inhabiting them and ethnic self-awareness. All this has resulted in not only their diversity but also the complexity of ethnic and interreligious relations.

Contemporary ethnic processes among Soviet peoples are complex and variegated in character. Consequently, it is nothing to be wondered at that Soviet leader Mikhail Gorbachev's policy of "glasnost" and "perestroika" is harder to put into practice in the Moslem-dominated countries than the Russian speaking heartland. As ethnic tension continued in the southern part of the USSR, a new popular front movement has been formed in Soviet Armenia to seek out a constructive way out of the ethnic crisis over Azerbaijan's disputed region of Nagorno-Karabakh. The draft program, published by the Latvian Popular Front, demanded their Baltic homeland be declared a sovereign state with full economic autonomy and veto power over Soviet decisions.

In this way, the actively pursued policy towards the international integration of the peoples has given rise to conflict between Russian and non-Russian people. National peculiarities are more abundant in the organization of domestic life, in using free time for emotional varieties of leisure, in values and manner of intercourse. The processes described above, which are characteristic of the integration of their culture, are accompanied by an increase in bilingualism and the rising importance of Russian language and all-Soviet culture elements.

緒　　言

1988年の2月から3月にかけてソ連邦国内では大規模な民族暴動が連続して起こり，かつてないほどの注目を集めた．これまでもカザフ共和国の首都アルマアタでは，クナーエフ政治局員の解任に端を発したデモで死傷者を出しており(1986年12月)，タタール人が翌年の1987年

7月に，クリミア半島への帰属を求めて坐り込みなどの3日間にわたるデモを行なったときも，一触即発の状態は続いていたとみてよい．にも拘らず，ソ連当局はその都度，それらは西側の挑発的な宣伝にのった一部の反ソ的行動であると決めつけ，ソ連邦にはもはや民族問題はない，との立場を頑なに守ってきた．だが現実には，昨年の初頭にもモスクワでタタール人が抗議行動を行ない，15人が身柄を拘束される(1988年3月)などの小競り合いは依然として続いていたのである．

一方エストニア，ラトビア，リトワニアのバルト3国でも同様の動きがあり，ラトビアの首都リガでは，87年6月と88年の3月にソ連邦によるラトビア支配に反対するデモが行なわれたが，この民族運動は直ちにバルト3国全体に広がっていった．さらに北欧のスウェーデンやフィンランドもこうした動きに呼応して，バルト3国との外交関係を強化する方針を打ち出した(1988年10月)．民族自立の急先鋒に立っているのがエストニアであり，同共和国では人民戦線を結成して9月には，民族語のエストニア語をロシア語と同等の公用語とする決定を行なった．これを受けた形で，10月7日にはリトワニア共和国最高会議幹部会がリトワニアをロシア語と並ぶ公用語にすることを決定したのをはじめ，翌日の8日にはラトビア共和国のリガで人民戦線の結成大会が開かれている．またきわめて注目すべきことは，10月20日にリトワニアで開かれた同共和国共産党中央委員会総会で，ソンガイラ第一書記を解任したことである．表向きの理由は年金生活にはいるためとなっているものの，バルト3国ではいずれも党第一書記が6月以降相次いで解任されており，深刻な民族問題に絡む人事移動であることは疑いを容れない．

だが何といっても，1988年2月28日のいわゆるスムガイトの暴動ほど，ソ連邦の民族問題が深刻な状態にあることをまざまざと見せつけたものはない．スムガイトはアゼルバイジャン共和国第3の都市であるが，この騒動のそもそもの発端は，人口の75%以上をアルメニア人が占めるナゴルノ・カラバフ自治州の住民が，アルメニア共和国への帰属がえを要求したことにある．ナゴルノ・カラバフ自治州は人口約15万人でその8割以上がキリスト教徒であるといわれ，ロシア革命前はトルコ人によるアルメニア人弾圧などでアルメニアとアゼルバイジャンは反目しあっていたのであるが，1923年にムスリムのアゼルバイジャン共和国に属したため，当初から複雑な民族感情を内包していたとみられる．ソ連邦においては，エスニック・アイデンティティを無視したこのような行政区画と強制的な線引きが，長期にわたって事態を悪化させるケースも少なくないが，その民族政策の矛盾は民族の言語政策に集中的に現れると考えてよい．88年3月4日に同自治州共産党ポゴシャン第一書記が，自治州とアルメニアとの文化交流や民族の言語による文学・教科書の保障などに誤りがあったことを認め，3月27日にはソ連邦を代表する労働組合中央評議会機関紙の「トゥルド」(“ТРУД”)が，編入要求の背景として種々の要因を分析し，そのなかでアルメニア人の学校で自民族の歴史に対する関心が十分払われてこなかった点が批判されているのも，このあたりの事情を物語るものとして興味深い．諸民族や言語の平等が標榜されながらも，その実態は，アルメニア語の初等・中等学校は閉鎖されたところも多く，アルメニア人の生徒がアゼルバイジャン語の授業を受けざるをえない，という有様だったのである．

ナゴルノ・カラバフ自治州のアルメニアへの編入要求は，スムガイト暴動の直前の2月20日に同自治州人民代議員ソヴェトが正式に決定したものであるが，当初ソ連邦共産党中央委員会総会で共和国の境界見直しが予想されていたこの問題も，3月23日のソ連邦最高会議幹部会で行政区画の手直しは否定され，民族問題を先鋭化する原因を多面的に分析するとともにその要

因を除去すること，民族主義的で過激化する現象に対処すること，生産集団や教育機関に実務的な状態を作り出すこと，を人民代議員ソヴェトに命じたにとどまった．翌日の3月24日に開かれた党政治局の定例会議でも，教育施設などの建設，アルメニア語による文学作品の出版を促進することなどの，比較的穏健な改善策が打ち出されたにすぎない．

6週間にわたって同自治州の州都スチェパナケルトで続行されていたゼネストは10月15日ようやく終結したが，その直後の10月18日からは，スムガイト暴動の首謀者と目される3人の被告に対する裁判がモスクワのソ連邦最高裁で始まった．アゼルバイジャン人が同自治州の分離に反対して32人の死者を出したスムガイト暴動は，アルメニア人側が地元での裁判の公正さに疑問があると主張したために，最高裁での裁判となったと伝えられている．この裁判が始まった頃，アゼルバイジャンに隣接するグルジア共和国では同共和国のマルネウリ地区で暴動が起こり，この騒ぎはさらに首都トビリシにまで広がって，トビリシのアゼルバイジャン学校閉鎖要求デモに発展したのである．一方ナゴルノ・カラバフ自治州にも10月21日には夜間外出禁止令が出されるなど，再び特別警戒体制が敷かれ緊張を高めている．

こうした動きにたいしては，ペレストロイカ（перестройка）グラスノスチ(гласность)政策を進めているゴルバチョフ共産党書記長も手をこまねいていたわけでは勿論なく，これまでも折に触れて民族問題に言及してきたのであるが，88年の10月25日にソ連邦主要各紙に発表された演説では，民族問題の解決にあたり武力による解決を戒めながらも同時に，とりわけ「法と秩序の維持」を強調していることが目に付く．民族問題の矛盾のあらゆる側面を見抜き，実生活の提起する問題に対する正しい回答を探究し，速やかにそれを解決する必要性を説いてきたこれまでのゴルバチョフの論調からすれば，今回の演説では新たなる地方的ナショナリズムに対する警告が大きな比重を占め始めた，とも受けとれる．だがいずれにしても，その内容は根の深いソ連邦の民族問題に対する頂門の一針とは言い難い．本稿では混迷をきわめるソ連邦の民族問題が，エスニック・アイデンティティと深く関わっていると考え，多民族国家におけるエスニック・アイデンティティの形成の要因をいくつかのエスニック・グループを対比することによって明らかにしていきたい．

エスニック言語過程の諸相

多民族国家における異文化接触を考察するにあたって，経験的に観察可能なものとしては広義の「シンボル」を挙げることができよう．周知のように，パーソンズ(Parsons)は行為における意味を志向あるいは構え・傾向性の様式と解した．志向の様式は，社会システムにおいては役割期待によって，またパーソナリティ・システムにおいては欲求性向によってそれぞれコントロールされているがそれ自体は観察されないのが普通である[1]．しかしこれを一たびスプラッドリー(Spradley, J. P)の言うごとくシンボルの交換，つまりシンボリック・インタラクションととらえるならば，行為においてはシンボルとして外化されているわけであるからそのシンボルを観察すれば行為の意味，すなわち志向様式を客観的に理解できることになる[2]．そこで本節では「文化」を，文化人類学者のギアツ(Geertz, C)にならって〈シンボルのなかに具象化されている，歴史的に伝えられた意味のパターン．シンボリックな形式のなかに表現された相続的表象システム〉ととらえ，信念や価値・規範を表現しているシンボルの交換過程を異文化接触の具体的場面において検討することにした．

先ずソ連邦において1897，1920，1926，1939，1959，1970，1979の各年計7回にわたって行なわれたセンサス・データを内容別にカテゴリーに分けることによってエスニック指標(民族

性・母語・第二語など)，社会・経済的指標(所得・地位・職業など)，社会・文化的指標(信仰など)，社会・統計学的指標(居住期間・子供の数・年令など)を得た．ただ，これだけの指標では多民族国家における意味のパターンは明らかにならないので，さらにこの指標をソ連邦科学アカデミー人類学研究所が，1967年から1976年迄14回にわたってエスニック言語研究として行なってきた二語併用の基本成分アンケートの内容別カテゴリーによって細分化した，以下の3ブロックでの平均的相関を調査した[3]．

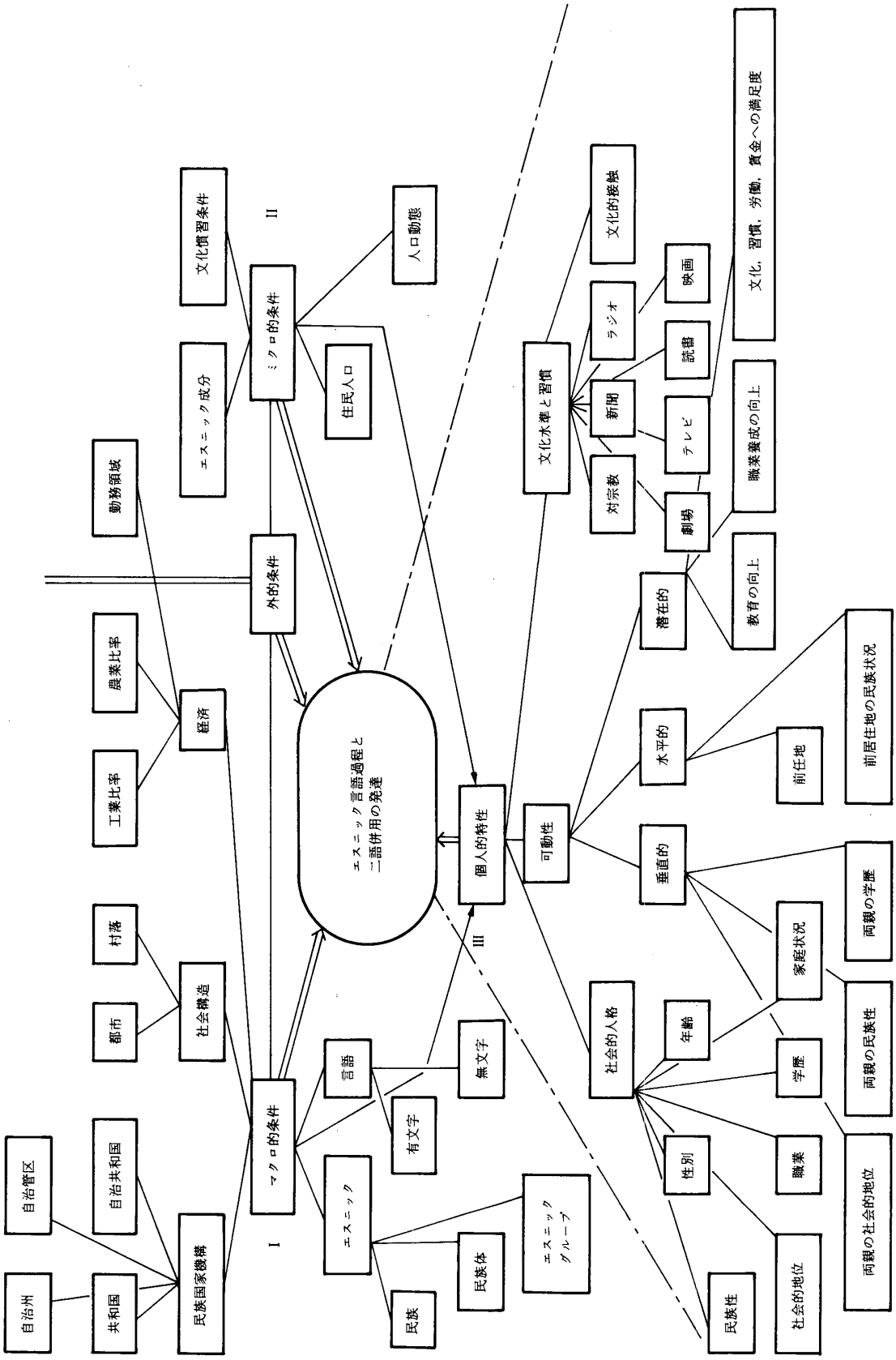
Ⅰブロック：労働および社会的活動(学校での成績，父母の職業・学歴，就業年令，最初の職業，本人の学歴，党派性，労働に対する満足度，社会的労働，集団での決定に対する影響力，選んだ仕事への興味の持続，専門性の持続，生産集団の民族成員，多民族集団への関わり方，年収など)．Ⅱブロック：文化生活(教育・社会に対する構え，趣味・レジャー，宗教・洗礼などへの対処，読書・観劇・テレビ・ラジオへの関心，音楽・踊り，友人・近隣の民族性，民族衣装・民族料理・冠婚葬祭での民族的定位，文化大衆施設への満足度，学校での教授用言語，子供の学校での教授用言語，家庭・職場での言語，マスコミの言語，二語併用能力，母語など)．Ⅲブロック：家族・家庭状況(家庭の定位，家庭状況，結婚年令，配偶者の職業，家族関係の評価，家庭規模，家族の成員，家庭の支配権，家族成員に対する平均支出，家族の職務配分，子供の数，両親の権威，長子の居住地や職業など)．

その結果，性別についてはすべての項目との相関が低く，年令と職業については他の項目との相関が高いことが分かった．少数民族のアイデンティティ形成に関わりの深い民族性の項目では，二語併用(言語能力)，音楽の趣味傾向，踊りの選択との間に高い相関が認められた．またシンボルの指標での相関は，①民族行動と民族心理学的構え(0.347)②民族行動と民族文化的定位(0.317)③民族心理学的構えと民族文化的定位(0.076)の順で，文化活動への関心度は二語併用能力の高さに比例し，文化に対する指示比は学歴・社会的地位の向上とともに，民族文化からロシア文化に傾くことが明らかとなった[4]．以上の主要因を考慮したうえで，エスニック・アイデンティティにかかわる言語過程を図式化すれば図1のようになるだろう．

多民族国家における文化接触については，文化化(enculturation)，文化変容(acculturation)，再文化化(reculturation, re-enculturation)などのサブ・カテゴリーを設けることが可能であるが，これらに共通した諸民族の社会的適応過程を，エンカルチュレーション・マトリックスによってエイジェント(agent)を介した社会的価値のシンボル交換過程(encode:decode)と仮定すると，その変容はまず外化されやすいシンボルの認知と行動レベルにおいて行なわれ，コード化の困難な情動レベルは容易に変容されないといえるだろう．その際，たとえば民族衣装や民族料理といった物質文化よりも，音楽などの精神文化のほうがエスニック・アイデンティティと大きく関連することは言うまでもない．

そこで，音楽とか踊りとかの曲のテンポ，音の高さ，コード体系などの諸要素が部分的にせよ，受け手の情動的反応と関連していることが仮定される．ファーンウォース(Farnworth, P. R)の指摘をまつまでもなく，踊りや音楽の選択はそうした意味で認知的側面よりも情動的側面で機能しているため容易に変容しないが，そのゆえにこそ民族のアイデンティティを測る尺度となる可能性の高いことが示唆されたことになる．この仮説を二語併用にあてはめてみると，二語併用能力は主として行動・認知の成分を構成するが，情動の成分に変容をもたらしたとき個体の社会的適応過程は同化のレベルの価値観の転換にまで至っていると考えられる[5]．

かくして異文化の学習ないしは文化変容は，もろもろの社会関係を通じて言語および技術の



図Ⅰ　エスニック言語過程の諸要因

ような認知・行動領域の学習から始まり，しだいに深く価値・規範など思想領域への学習へと進んで，ついには情動のレベルで内面化されるのである．この過程を典型的な文化接触地帯であるカレリア自治共和国を例にとり考察していこう．同自治共和国は1923年にソ連邦内の自治共和国を編成したのであるが，ソ連との抗争(いわゆるフィンランド戦争)を経て1956年に全域が現在の版図となったこともあり，ロシア人に対するフィンランド人の感情には複雑かつ微妙なものがある．彼らの伝統的な民族楽器は弦の数28本から36本のカンテレで，これによって壮大な民族大叙事詩「カレワラ」などが奏でられる．またカンテレはカドリール，ランショー，

表1　民族文化的志向との相関（カレリア自治共和国）

カテゴリー	——言語的特性——（各グループでの%）					——職業・社会的地位（各グループでの%）——							
	自由に駆使できる言語		両言語を自由に駆使する	母語とみなす言語		非熟練肉体労働者	中度熟練肉体労働者	高度熟練肉体労働者	事務員	中度班専門家	中度班指導者	高度班専門家	中度班指導者
（回答者数）	カレリア	ロシア		カレリア	ロシア	216	213	178	139	144	52	83	67
	%					%							
・カレリアの民族舞踊を知らない	40.0	69.9	53.8	46.1	72.4	51.8	57.7	63.3	51.0	52.1	47.3	50.6	40.0
——ダンスが好きである——													
・カレリア民族舞踊が好き	14.9	3.5	9.6	10.7	1.7	16.5	5.5	3.0	7.4	6.0	6.1	8.0	2.0
・ロシア民族舞踊が好き	47.5	34.4	42.4	40.3	35.6	58.2	39.2	43.8	41.6	35.1	38.8	33.0	39.2
・バレーが好き	16.3	25.0	25.8	25.5	23.4	14.2	17.5	21.3	22.1	32.5	30.6	43.2	39.3
・モダンダンスが好き	17.7	31.5	17.3	19.0	33.6	11.8	31.3	26.6	22.1	21.9	18.4	13.6	17.6
・カレリア民謡を知らない	61.8	80.0	64.0	64.9	85.0	73.7	76.2	75.4	68.9	63.9	61.8	62.8	62.0
——歌が好きである——													
・カレリア民謡	11.9	2.9	6.2	9.1	1.8	11.0	4.6	2.6	5.6	4.6	4.7	5.3	1.6
・ロシア民謡	56.6	38.2	55.4	51.1	39.6	55.7	50.4	52.1	47.8	42.2	54.4	47.9	53.2
・現代ソビエト民謡	25.2	49.2	32.9	33.8	48.8	27.8	36.4	38.5	38.5	42.8	33.3	45.7	37.1
——音楽が好きである——													
・カレリア民族音楽	11.5	2.7	6.3	7.3	1.5	10.1	3.2	6.5	5.3	4.4	1.9	3.2	5.5
・ロシア民族音楽	63.3	37.7	52.8	53.7	36.0	65.6	47.7	51.6	45.4	39.0	43.4	40.9	47.3
・クラシック	2.9	9.2	9.9	8.2	11.4	2.0	7.3	5.4	9.2	10.7	15.1	21.5	20.0
・ミュージカル，ポピュラー	20.1	48.2	27.8	28.1	49.9	18.2	41.4	34.9	36.2	41.5	35.8	31.2	25.5
	社会・専門グループの平均年齢					42.5	35.8	36.6	32.5	35.0	38.8	39.9	40.0
	教育の平均レベル（修学年限）					5.1	7.4	7.7	8.6	10.7	9.9	12.8	13.0

リスタコンドラなどの民族舞踊の演奏に不可欠である．

この表でも明らかなように，若年層ほどカレリア文化に対する関心が低下しており，10代では約8割の若者がカレリアの民族舞踊も民謡も知らず，逆にロシア民謡やロシア舞踊への選好性を高めている[6]．この傾向は学歴においても同軌で，教育水準・学歴が高くなるほど彼らの選好性はカレリア文化からロシア文化へと傾斜してしまう．また言語的特性との関連で言えば，二語併用(ロシア語使用)者のカレリア文化に対する無関心が顕著であり，職業・社会的地位との関連では，インテリにおいてカレリア民族舞踊や民謡を知ってはいるが好きではない者のパーセンテージが高い．また彼らの多くはクラシックやバレエに関心を持ち，肉体労働者に人気のあるモダンダンスやロシア民謡に対する選好性にはあまり大きな変化を見せていないのも特徴といえる．

こうした社会・統計学的特性および構えについて，チェプロフの相関係数で見ると次のようになる．括弧内は，年令・教育水準・社会的地位，の順である．ダンスに対する好み(0.248／0.191／0.161)，音楽に対する好み(0.237／0.228／0.156)，歌に対する好み(0.195／0.157／0.114)，結婚・挙式での選好性(0.142／0.122／0.145)．カレリア人の信仰する宗教はギリ

シャ正教であるが，信者であるかどうかを問わず，さまざまな文化的活動を通じて若年層を中心にロシア化が進行していることが窺われる[7]．とりわけ二語併用と関わりながら認知•行動レベルにとどまらず，情動レベルの価値観の転換にまで文化変容が及ぶ可能性のあることが予想されるのである．

レニングラード在住のエスニックグループにみる文化に対する構え

ソ連邦の都市総数は2152にのぼるが，それらは小都市(人口1～3万人)，中都市(3～10)，大都市(10～50)，超大都市(50～100)，巨大都市(100万以上)の5つのカテゴリーに分けられる．今回調査対象としたのはモスクワに次ぐソ連邦第2の巨大都市レニングラードである．人口増加率がモスクワ，オデッサについで低くやや伸び悩みの状態にあるとは言うものの，その民族構成からしても典型的な多民族都市といってよい．1979年調査時点での人口は約457万人であり，その大半の約410万人はロシア人であるが，以下ユダヤ，ウクライナ，ベロルシア人など，公式に登録されたものだけでも13の非ロシア民族を擁している[8]．そこでまず散居性の

表2　レニングラード在住のアルメニア(A)、タタール(T)、エストニア(E)人におけるエスニック文化に対する構え

——言語行動——

インデクス	エスニックグループ	構えのタイプ			平均
		同化主義	国際主義	民族主義	
自分の民族語を母語とみなしている	T	57.1	68.1	87.8	66.9
	A	7.9	51.4	—	42.4
	E	17.2	57.1	—	31.7
自分の民族語で自由に話したり読み書きができる	T	25.8	40.2	55.3	35.7
	A	5.2	44.8	—	35.9
	E	12.5	60.7	—	31.2
家庭のなかでの伝達言語として民族語を用いる	T	48.6	62.3	80.6	59.8
	A	2.6	32.4	—	25.3
	E	4.7	21.4	—	11.6

——民族の接触行動——

インデクス	エスニックグループ	構えのタイプ			平均
		同化主義	国際主義	民族主義	
混合婚である	T	35.3	24.8	14.9	26.8
	A	73.7	51.4	—	55.7
	E	81.3	67.9	—	76.3
自分と同じ民族の親友がいる	T	45.2	51.5	70.2	54.9
	A	26.3	54.3	—	49.0
	E	12.5	42.9	—	26.0
隣近所が同民族出身者であるかどうか知らない	T	44.6	28.6	10.9	32.2
	A	73.7	68.6	—	69.6
	E	90.6	62.5	—	79.9
通りで出会った人の民族的出自が気にならない	T	18.4	9.5	0.0	12.0
	A	23.7	8.6	—	12.8
	E	32.8	32.1	—	33.1
5年間で1度以上は自分の共和国を訪れる	T	33.3	45.7	51.2	41.7
	A	34.2	75.2	—	64.6
	E	56.3	80.4	—	62.6

強いムスリムであるタタール人(民族母語指示比54.4%)，そしてアルメニア正教を信仰し彼らとは対立的関係にあるアルメニア人(民族母語指示比34.4%)，もう一つはレニングラードで共和国民族としてはもっとも民族母語指示比の低いエストニア人(民族母語指示比22.4%)の3つのエスニック・グループのアイデンティティを比較してみよう．

表2は民族出身の作家や歴史的な出来事を列挙してもらい，それの内容を分析したうえで，同化主義，国際主義，民族主義の3つのカテゴリーにエスニック意識を分けて民族的特性を見たものである．紙幅の都合でここには掲げることができなかったが，文化情報源に対する興味では，民族作家・民族音楽・民族語によるラジオ傍受，いずれの項目においてもタタール人とアルメニアのエスニックグループの民族主義的傾向のきわだって強いことが窺われる．これとは対照的にエストニア人では，母語のエストニア語で書かれた民族作家の本を持っている者や民族の劇・音楽に対する関心が低く，民族音楽のレコードを所有しているのはわずか14.1%に過ぎない(タタール人は56.5%，アルメニア人は48.1%)．これからみてもエストニア人においては，かなり同化が進んでいるとみてよいだろう．これは，エストニア人の移住時期が早かったために，レニングラード在住のエストニア人の年令層が高いところに集中していることが主要因となっている．

言語行動においても，読み書きの程度に大きな差はみられないのに，民族母語指示比や，家庭のなかでの使用頻度は，特にタタール人で圧倒的な民族主義的傾向をもっていることが分かる．それでは民族の接触行動についてはどうだろうか．エストニア人が，あまり他人の民族的出自を気にかけず，混合婚にも積極的であるのにたいして，タタール人とアルメニア人は大変強いエスニック意識をもっていることが際立った特徴となっている．彼らはロシア人との結婚に対しても慎重であり，ここに独特のエスニック・アイデンティティをみることができる[9]．

このようにムスリムをはじめとする宗教のアスペクトは，強固な民族主義傾向を内包しているのであるが，それにもかかわらず彼らのなかにも同化主義，国際主義的な構えもみられる[10)11)12)]ために，ムスリム住民に次のような4つのアイデンティティーを想定する研究者もいる．a．氏族・部族への帰属感につながる亜民族(sub-national)意識．b．境界画定のために分割・区分させられた30以上の「民族」にそれぞれ帰属する民族(national)意識．c．単一ソヴェトならぬ単一ムスリム人民の形成につながるイスラム共同意識．d．連邦国家ソ連の市民としての民際(inter-national)意識[13]．だが，こうしたいわば重層的あるいは多層的エスニック・アイデンティティはムスリムに限ったことではなく，大なり小なり非ロシア人のエスニック・グループに広く観察されることが上述したことからも明らかであろう．

ムスリムとロシア人のエスニック・アイデンティティ

それでは，典型的なムスリムであるタタール人と最大の基幹民族であるロシア人との間には，どのような行動的特性の違いが見られるだろうか．タタール自治共和国における両者を職業カテゴリー別に見ると，ロシア人は博物館・観劇・小旅行などの文化行動と日用品の買い物などの日常行動とが相互に独立し分離したものになっているのに対して，タタール人では両者が密接にからみあったいわば未分化な状態にあることが分かる[14]．インテリになると多少分化してくるとは言うものの，ロシア人に比べると依然として凝集型であることが特徴といえる．

次に文化要求の満足度について分析してみよう．全般的にタタール人のほうが文化項目数が上回っており，学歴が高くなるに従い満足度も増加する．ところがロシア人ではちょうど逆に，学歴の向上とともに満足度の低下が見られる．これはムスリムの文化圏がロシア人にとっては

必ずしも居心地のいいものでなく，ロシア人が自らのエスニック・アイデンティティを意識化すればするほど，ムスリムとの心理的葛藤を引き起こすことを意味している．

なおレニングラードのタタール人における行動特性を検討してみると，そこには凝集型から分離型へのいわば折衷型，あるいは移行型とでも言うべきパターンが観察される．それはロシアにやや近いパターンではあるが，労働者においては親類づきあいと文化行動が未分化であるのに対し，インテリでは分離しているなどの特徴が目に付く．また，大都市ほど文化的活動の内容が多様化するが，レニングラード・タタールでは冠婚葬祭などの民族的儀式に関しては，誕生・結婚・葬儀の3代儀式における文化慣習の保持率は前者から後者になるほど高くなり，部分的に慣習を保持している者は減少して All or Nothing 型のオルターナティブな選択をする傾向が顕著である．これ以外にも，エスニック・アイデンティティの要因として，学歴の低い者ほどイクスイプリシットな項目 (たとえば衣装，外見，言語，料理など) をあげる傾向が見られる．

このように，急速な工業化や都市化，あるいは国際化によって諸民族のエスニック・アイデンティティはきわめて多様な様相を呈しているわけだが，男性中心のムスリムにあってこうした影響を受けにくい立場にあると思われる女性のエスニック・アイデンティティについてはどうだろうか．

現在民族問題で揺れるアゼルバイジャンの教育大学に学ぶ女子学生と，モスクワ大学のロシア人女子学生とを比較してみたい[15]．両者の社会行動マトリックスには興味深い対比が見られる．表3の左欄がアゼルバイジャン人，右側がロシア人であるが，〈私・私の母・理想的女性像・

表3　アゼルバイジャン人女性とロシア人女性の社会行動マトリックス

社会的行動	役割的立場																	
	私		私の母		私からみた理想的女性像		社会からみた理想的女性像		我々の社会の典型的女性		40年前の女性		20年後の女性		生活的に恵まれない女性		私の軽蔑する女性	
街で気軽に声をかけて友達になる	18	71	0	52	18	56	2	67	30	67	0	32	72	76	60	72	80	52
新聞で結婚広告をする	0	20	0	5	8	13	0	33	15	28	0	6	67	59	64	72	60	64
いつも新しい人間であることの必要性を感じている	82	67	71	32	81	68	70	74	58	79	50	48	90	75	76	56	44	60
高等教育を受けたいと考えている	88	87	45	55	76	95	61	95	65	65	25	42	100	86	28	78	24	42
夫が浮気をするなら自分もする	8	38	1	14	12	30	16	43	32	56	0	29	55	55	48	55	72	83
同僚に夫婦げんかのことを話す	4	5	12	11	8	0	15	10	40	52	16	21	52	30	61	64	71	82
家族のために裁縫や編物をする	63	80	80	91	91	92	80	96	67	80	84	72	83	72	48	64	28	32
夫の友達がいる前で夫に小言を言う	0	44	8	46	0	33	13	31	31	48	0	34	54	55	56	72	88	69
高額の買い物をしたことを夫に内緒にする	11	16	8	19	6	4	17	15	34	54	10	32	28	40	60	64	81	82
姑とけんかするよりは我慢する	72	33	88	56	55	44	88	52	67	51	99	65	28	38	43	56	36	82
煙草をすう	0	32	0	5	8	5	0	54	26	68	0	8	56	55	58	72	64	84
社会的活動に積極的に参加する	48	60	43	68	64	74	44	70	55	63	16	45	84	78	52	71	24	64
結婚しないで暮らす	11	27	0	27	0	24	0	32	11	46	0	33	36	44	26	56	40	51
ダンスやディスコに行く	60	90	7	57	60	81	16	98	46	83	4	76	60	95	54	64	76	76
子どものために嫌いな夫と暮らすよりは離婚したほうがよい	31	59	0	56	47	51	9	66	36	64	4	36	64	72	43	52	80	64
自分の人生が無意味に思える	44	75	43	60	6	50	4	44	44	41	50	30	48	64	68	88	44	16
近所の人とおしゃべりをする	16	52	12	36	10	26	20	46	48	79	44	68	76	64	62	64	78	84
夫の友達があなたの気に入らない人でも歓待する	38	64	50	83	41	84	68	72	50	60	64	72	98	56	50	48	20	21
家計を切りまわす	38	79	30	78	32	66	32	76	51	88	16	61	80	84	52	77	60	66

〔注〕左欄：アゼルバイジャン人　右欄：ロシア人

40年前の女性•20年後の女性〉など9項目の役割的立場と「いつも新しい人間であることの必要を感じている」「高等教育を受けたいと考えている」「社会的活動に積極的に参加する」などの社会的行動との相関ではアゼルバイジャン人が伝統的な社会的行動に肯定的評価を与えているのにたいし，後者の場合は近代的なモデル化を志向しているとみてよい．たとえば「夫が浮気をするなら自分もする」とか「夫の友達がいる前で夫に小言を言う」「結婚しないで暮らす」「子供のために嫌いな夫と暮らすぐらいなら離婚したほうがよい」といった社会的行動は，アゼルバイジャン女性にあって40年前にはほとんど0％で，ロシア人女性がいずれも30％前後と大きな差があるが，20年後の女性像の予想は，両者の差は全くといいほど見られず，〈私〉，あるいは〈社会からみた理想的女性像〉との大きな食い違いが注目される．

これをもっと分かりやすくするために，さきほどの9項目にさらに具体的モデルを加えて，〈伝統的—解放的〉と〈評価〉の意味空間を作ってみよう．アゼルバイジャン女性では肯定的評価を受けているもののうち5つが伝統的系列の役割的立場であり，〈20年後の女性〉〈ロシア人女性〉〈エストニア人女性〉〈グルジア人女性〉の解放的系列の4項目を上回っている．しかしここで見逃してならないことは，40年前のアゼルバイジャン女性が否定的評価を受けていることと，他のエスニック・グループの女性にたいしても，グルジアのように伝統的性格の強いグループよりはロシア人，エストニア人などのより解放的なエスニック・グループのほうがむしろ高い評価を得ていることである．

これに対して，ロシア人の女子学生はほとんどの解放的項目に高い評価を与えている．ところがきわめて興味深いことは，伝統的項目でもマイナスの評価を受けているものはなく，むしろ余りにもソビエト的な女性はかえって低い評価を与えられている，という点である．たとえばアントニナ，カテリナ，リュドミラは，いずれも我が国でも放映された「モスクワは涙を信じない」という映画のなかに出てくる女性であるが，つつましやかなアントニナとやや活動的なカテリナが肯定的に評価されているにもかかわらず，「翔んでる女性」のリュドミラが現代のロシアの典型的女性に近く，マイナスの評価を受けているのは大変興味深い．いずれの場合も，高等教育を受けた女性が現状に対する批判的力量を身につけ，エスニック・アイデンティティに大きな影響を与えているとみてよい．このようにアゼルバイジャン人の場合は，価値の形成ルートが男性中心の価値規範に大きく影響を受けてはいるものの，それらを変革しようとする意識が徐々にではあるが，若い世代に生じつつあることが予感されるのである．

ま　と　め

エスニック・グループの文化活動一般への関心度は二語併用能力の高さに比例し，文化に対する選好性は学歴・社会的地位の向上とともに民族文化からロシア文化に傾く．その変容はまず認知と行動レベルにおいて，最終的には情動レベルで遂行される．ムスリムにおいては伝統的な社会的行動に対する評価が高いが，若年層には緩慢ながらも近代的なモデル化の浸透による意識の変化が看取される．

文　　献

1）徳安彰「教育における“意味”と文化システム」（『思想』No. 4）岩波書店．1985　p. 304
2）江淵一公「教育人類学」（『現代の文化人類学』2）至文堂．1982　pp. 217-218
3）Губогло М. Н. Современные Этноязыковые Процессы в СССР. М. 1984 стр 34-58
4）Арутюнян Ю. В. Этносоциальные Аспекты Интернационализации Образа Жизни. ж. С. Э 1979. 2 стр 3-18

5) 箕浦康子『子供の異文化体験』思索社. 1984 pp. 273-290
6) Брук С. И, Губогло М. Н. Факторы Распрстранения Двуязычия у Народов СССР. ж. С. Э 1975. 5 стр 21
7) Клементьев Е. И. Национально-Культурные Ориентации Карельского Городского Населения. ж. С. Э. 1976. 3 стр 60
8) Могилевский. Р. С. Проблемы Качества Жизни Крупного Города. Л. 1987 стр 90
9) Бромлей Ю. В Национальные Отношения в Современную Эпоху. М. 1986 стр 248-274
10) Старовойтова Г. В. Этнические Группы в Современном Городе ("Расы и Народы" 17) 1987 стр 120
11) Старовойтова Г. В. О Формировании Татарской Части Населения Петербурга—Ленинграда. ж. С. Э 1980. 1
12) Старовойтова Г. В. К Исследованию Этнопсихологии Городских Жителей. ж. С. Э 1976. 3 стр 50-51
13) 江口朴郎編『現代世界と民族』山川出版. 1987 pp. 427-430
14) Старовойтова Г. В. Этническая Группа в Современном Советском Городе. Л. 1987 стр 108-116
15) Петренко В. Ф Психосемантический Подход к Этнопсихологическом Исследованиям. ж. С. Э 1987. 4. стр 22-38